終助詞ネに関する二三の観察

——落語を音声資料として——

服　部　　匡

0　はじめに

終助詞ネに関しては、近年、その用法や機能・文法的特性、および、音調的特性の両面から研究が盛んである。しかし、音声を含んだ実例に基づく研究は必ずしも十分に行われているとは言えない。ここでは、市販ＣＤに録音されている落語を素材にして、そこに現れるネの性質をいくつかの方向から観察することにする。容易に入手でき、だれもが実際の音声を聞いて確かめられる発話資料として、落語のＣＤは日本語研究に活用しうる。例えば五代目古今亭志ん生の口演のうちＣＤ化されているものは266席（138演目）にのぼる（小学館『ザ・ベリーベスト・オブ志ん生』付録のデータブックによる）が、一個人の発話資料がこれほど大量に容易に利用できる例は落語以外では少ないと思われる。また、ＣＤは任意個所からの再生ができる点や、コンピュータ上で扱える点でも音声言語の研究に便利である（最近出始めた各種のＤＶＤも同様に利用できる）。[1]

実例には「ＣＤ番号　トラック番号－分：秒」の形で、当該のネ（下線）の個所の位置を示す。

ここで扱うのは明治20年代から30年代の生まれで言語形成期を東京で過ごした演者による落語（以下単に落語と呼ぶ）であるが、伝承芸としての落語の性格上、演者自身の日常的言語よりやや古い時期の東京語の特徴を含んでいる可能性がある。[2]

本稿ではネが主文の述語を構成する用言的要素に直接付く用法のみを取り上げる（「困るね、それは」のように述語の後に後置要素を持つものも含める）。体言や体言相当要素、副詞、助詞（他の終助詞も含む）等に付く例は扱わない。いわゆる平叙文につくネのみを取り上げる（命令・依頼等の形式で終わる文、いわゆ

る疑問詞を含む文（「何を言うんだね」の類）は考慮外とする。ダローネも扱わない）。短い（1拍の）ネのみを問題にし、明らかに2拍（以上）に伸びているものは扱わない。

音調の概略を、以下の記号により表記する。当該拍の頭から高くなることを「○、当該拍の次から低くなることを○┐、当該拍の中で上昇することを『○、当該拍中で下降することを○』と表す。特に大幅に上昇・下降する場合は「「、┐┐などと表す。

落語の台詞（音調も含め）は、すべて、筆者が聞き取ったところにより表記する。ただし、作業の過程で下記の本を参考にした。訛音の表記は、正確でない場合がある。

古典落語　文楽集　筑摩書房　1989
桂文楽全集　立風書房　1974
圓生全集　青蛙房　1980
圓生古典落語 1—5　集英社　1979
五代目古今亭志ん生全集　弘文社　1977（改定して『志ん生古典落語』2000）
志ん生文庫　立風書房　1977（改訂版　1993）

1　平叙文末のネの音調—ネは上昇するとは限らない—

本節で扱うネは、現在の共通語で一般的に用いられるネと大きくは異ならない性格のものであり、先行要素に順接するものである。

落語の用例を検討する前に、若干、従来の研究に触れておく。森山卓郎氏は、平叙文の文末におけるネは（ネーと延びる場合を除けば）必ず上昇調を取るというイントネーション制約を持ち、これに違反すると極めて不自然になる（イントネーションが一義的に決定されている）とされた（森山　1989:181）。これに対して筆者は、上昇しない場合もあることを指摘した（服部　1999）。川上秦氏によれば、少なくともご自身および、氏の周辺の東京アクセントを話す、さほど若くない人たちの言語については、筆者の説が正しいということである（川上　2000）。

なお、ネは常に上昇調をとるという記述は森山氏が最初ではなく、早く永田(1935)に同様の記述が見える（ただし、ナも音調に関してはネと同じという趣旨のように読める）。佐久間（1929）には「ぜ・ぞ・わ・え・な・ね・よ」の全てが「上昇

的進行」を遂げるという記述があるが、今日から見れば不備な観察のように思われる。他方、上昇しない場合もあることを明確に述べたものには、国立国語研究所（1963:181 の表、宮地裕氏執筆）、Alfonso（1980:1143）がある。

１・１　有核要素につく場合

まず、ネが有核（起伏）の要素について音調的まとまりをなす場合について述べる。

１・１・１　非上昇調のネ

このタイプは、現在の共通語でも聞かれるが、落語では頻繁に出現している。下がり目の後の拍の始まりからネの終わりまで下降してゆく。

(1)　（無茶な客から逃げ出して）

廓の若い衆：驚いたね　こりゃあどうも

オ「ドロ」イタネ

（志ん生　五人廻し　OCD-43007　1-22:33）

(2)　（相手が喧嘩腰の発言をしたのに対し）

男：な、なんだい　怖いね、どうも　付き合いにくいね、どうも

コ「ワ」イネ　「ド」ーモ　ツ「キアイニク」イネ　「ド」ーモ

（文楽　酢豆腐　VICG-15076　3-4:56,57）

(3)　（旦那（＝聞き手）のお供で吉原に行った時のことを回想し）

鰻職人：あたくしの相方　思い出したよ　だんな　あんな長え面の女てな

ないね。

ア「ンナナ「ゲ」ーツラノオ「ンナ」テナ　「ナ」イネ

（文楽　素人鰻　VICG-15079　1-13:13）

(4)　常吉の妻：ご無沙汰はいいけども　どうしたんだよ　まるっきり顔も見せ

ないね。

マ「ルッキリカ「オモミ「セ」ナイネ

（圓生　猫忠　SRCL3867　4-0:16）

(5)　（玉代を返せという客に）

廓の若い衆：　困りますね。

コ「マリマ」スネ

（志ん生　五人廻し　OCD-43007　1-22:33）

(6)　(唐茄子を買ってくれるという人に)

男：いいかい？　そう？　ああ　すいませんね　二つ？

ス「イマセ」ンネ

(圓生　唐茄子屋　SRCL3857　5-0:38)

(7)　仲蔵：ひどい雨になりましたね

ヒ「「ド」イア」メニナリマ」シタネ

蕎麦屋：へえ　どうもだいぶ降り出しましたよ（うでが？）すが　なあにもうじきあがるでしょうから（略）

(圓生　中村仲蔵　SRCL3859　5-0:38)

(8)　(夫が嘘をついて妾宅に出かけていたのを発見し)

旦那の妻：本所の川田さんへおいでになると言ってうちをおでかけになったんではございませんの。まあ妙なところに川田さんのお宅があるんでございますね。一体どうしたんでございます。

カ「ワダサンノオ「タクガ「ア」ルンデゴ「ザイマ」スネ

(圓生　一ツ穴　TECR-20027　1-21:35)

1・1・2　上昇調のネ

これは、現代の共通語でもありふれたタイプであり落語でもよく出現する。いくつか例を示しておく。(9)は独言である。(10)以下は聞き手を前にしての発言であるが、(10)はむしろ自分自身の記憶の確認である。

(9)　(女郎が客の寝姿を見て)いやだね、まあ　いびきをかいちゃ　合いの手に寝言を言ってるんだ

イ「ヤ」ダ「ネ」マー

(圓生　品川心中　SRCL3485　7-1:21)

(10)　(旦那に女との間のいきさつを尋ねられ)

幇間：いや　ですけどもさあ、(略)向こうはなんとも思っていないらしかったんですね（略）

ム「コーワナ「ントモオ「モッ」テイ「ナイラ」シカッタンデス「ネ

(志ん生　つるつる　FDLA4018　2-9:59)

(11)　男：女の子に評判がいいよ若旦那　噂ぁとりどりだよ

若旦那：よっ　おっしゃったね　うふっ（略）

オッ「シャッ┐タ「ネ

（文楽　酢豆腐　SHO-KB05　1-13:19）

⑿　（死んだと思っていた客が来たと聞かされ半信半疑だったが、実際に姿を見て）

女郎：本当だね　…　ちょいとお前さん　無事だったんだね

ホントーダ「ネ　「チョ┐イトオ「マエサン　ブ「ジダッ┐タンダ「ネ

男：うん　無事だった

（圓生　品川心中　SRCL3485　12-2:23）

⒀　道具屋の妻：（中略）で、口銭は要りませんから、どうぞと言って、向こうへぱっと売っちゃわないとしょうがないよ、え？分かったね

ワ「カ┐ッタ「ネ

（志ん生　火焔太鼓　OCD-43001　1-16:33）

⒁　男：どうも　いいお燗ですね　じゃ　兄いに一つ　お返しに一杯いこうじゃありませんか

「イーオカンデ┐ス「ネ

（圓生　猫忠　SRCL3867　6-4:12）

1・2　無核要素につく場合

ネが無核（平板）の要素について音調的まとまりをなす場合について述べる。次のような例では、ネの拍が前の拍より高く、一種の上昇調と解釈される。

⒂　妻：ちょいとお前さんどうかおしだね？

「ド┐ーカオ「シダ「ネ

（文楽　締め込み　SHO-KB09　1-10:54）

⒃　男：なあんだよ　嫌な野郎だね、こいつぁあ

イ「ヤ┐ナヤ「ローダ「ネ┐コイツァ

（志ん生　強情灸　OCD-43003　2-12:30）

一方、⒄のような例では、ネの拍での上昇はさほど明白ではなく⒅⒆では上昇が感じられない。これらは連続的なように思われる。⒅⒆のような音調の解釈についてはしばらく保留しておきたいが、無核要素の後では上昇の有無の中和が生じる可能性を考えるべきかと思われる。[3]

(17) 将棋を指す男：なあんだ　真似をしたね

マ「ネオシタ（「）ネ

（圓生　浮世床　SRCL3803　4-6:10）

(18) 女郎：あたしをだましたんだね　よくだましておくれだね

ア「タシオダ「マ」シタンダ「ネ　「ヨ」クダ「マ」シテオ「クレダネ

(19) 佐平次：ええ　何時に入れんの？火を　11時に？　うーん　じゃもう　沸いてんね　お湯の方は

ワ「イテンネ

（圓生　居残り佐平次　SRCL3801　4-0.33）

無核要素につくネについては、なお検討すべき点があるが、別の機会に譲る。

2　ネの機能と音調の関係についての考察

蓮沼昭子氏はネの機能について次のように整理しておられる。

(20) 発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということを、話し手が話の場に持ち出し確認する。

この特徴自体は、今とりあげたネにも当てはまると思うが、音調と機能の関係をどのように捉えたらよいであろうか。仮に次のように考えておく。典型的な場合、上昇調のネは（相手にか自分自身にか）確認を促す姿勢の発話で用いられ、非上昇調のネは、むしろ一方的に確認を遂行する姿勢の発話で用いられる。

例えば(5)のような場面では、上昇調より非上昇調の方がより話者の迷惑感の表明が感じられるが、相手に確認を促すというより一方的に確認を遂行することから来るものではないかと考えられる。また(8)は皮肉であり、相手に反応の余地を与えぬ言い方のように感じられる。

上のことは、最終的には、より一般的な、終助詞の音調と機能の関係という観点から捉える必要があると思われる。

3　ネとナの関係、ネは独り言で用いられることもある

以上でとりあげたネにはナにも対応する用例がある。ネとナの関係に触れる。

ナと異なってネは、聞き手の存在を必要とするという記述をよく見かける。上

野田鶴子氏は更に進んで、「ネは自分自身を聞き手としては用いられない」と指摘された（1972:69）。

しかし、落語では、純粋の独り言において、ネもナもよく出現している。ネの例をあげる。これには上昇調も非上昇調も見られる。

＝(1)　（無茶を言う客から逃げ出して）

廓の若い衆：　驚いたね↓　こりゃあどうも

オ「ドロ」イタネ

（志ん生　五人廻し　OCD-43007　1-22:33）

(21)（女郎が客の寝様を見て呆れ）まあ、いやだねえ…なんてえ寝様だろう、（中略）よくこんなにぐうぐう寝られたもんだね↑（中略）　きたないね、まァ。こんな奴と一緒に死ぬかと思うと情けないよ、まあ　相手がないから死んでやるんだよ、口惜しいね↓

「グ」ーグーネ「ラレタ「モ」ンダ「ネ　／　ク「ヤシ」ーネ

（圓生　品川心中　SRCL3485　7-1:45,2:16）

もっとも、ネの場合は自分自身を聞き手と意識しての発話であるとすれば、ネが基本的には聞き手を要するということと矛盾するわけではない。この点について、松下大三郎氏が次のように述べておられる。

(22)　これ[＝ネやナ]は對手の無い独言にも用いられる。「やあ雷が鳴り出した、これは晴れるな。」の類だ。自己が自己と對話する形式で自問自答である。自問自答的意識が鮮な場合には「晴れるね」と云ひ鮮でない場合には「晴れるな」などといふ。（1930:57）

自分自身を聞き手として明確に意識する場合にネが用いら、聞き手の意識が明確でなければナが用いられるという指摘は興味深い。他に、話者の属性等に関わる要因も考慮する必要があるのは言うまでもない（例えば、落語でも、上野氏の指摘の通り、丁寧体でナを使用するのは、成人男性の登場人物に限られる）。

また、上野氏は「困ったなと思った」のように心内語を表す場合にはナは可能だがネは可能でないとされた。資料には、ナの例があるが、ネの例は今のところ見つけていない。

(23)　お引けになったなと思う時分を見計らって俺があがるんだが　そうだなあ　一人じゃいけねえなあ

（圓生　品川心中　SRCL3485　11-5:45）

4　補説：ダーネの変異形と見られるダネ

一見、ダに低接するネが見られる。これは、現代の共通語では一般的でないと思われるタイプのネである。「ダネ」全体で「ダーネ（ダワネ）」の変異形とみなすべきものと考えられる（その長音はまた、ｉ・ｅで終わる要素の後でヤと交替する：「イ˥ーヤネ、「ネ˥ーヤネ）。次のような音調をとる。

(24)　無核体言等＋ダ（桃だ　モ「モダ）につく場合：モ「モダ˥ネ

有核体言等＋ダ（本だ　ホ˥ンダ）につく場合：「ホ˥ンダネ

後者の場合は音調的には１・１・１のタイプと区別しがたいが、機能は異なる。

(25)　番頭：いえ　ただ「いい」じゃあ困ります。お道楽はやむんですか？

若旦那：そりゃおまえ当たり前だね。

ア「タリマエダ˥ネ

（圓生　山崎屋　SRCL3885　3-01:43）

(26)　男：それ何ですか、誰が着るんです？

常吉の妻：うちの人がおさらいで着るから縫っているんだね。

「ヌ˥ッテイ「ル˥ンダネ

（圓生　猫忠　SRCL3897　4-01:44）

これに対応するダナも見られ、用例数はそちらの方が多い。ダネの場合とは位相的な相違があると思われる。

5　まとめ

本稿では、やや古い年代の話者の話す東京語の資料として、落語の録音における終助詞ネの用法を、平叙文の場合に限り、いくつかの観点から観察した。より包括的な記述は、今後の課題としたい。また、より新しい年代の話者の使用するネの実態については別の種類の資料に基づいて解明していきたいと考えている。

注

（1）ただし、ＣＤは編集上のカットにより、元の口演内容と若干異なることがある。カット

の存在および、録音と速記の関係について、草柳俊一氏にご教示いただいた。記してお礼申し上げる。

（2）『古今東西落語家辞典』（平凡社 1989）および本文にあげた文献によれば、それぞれの演者の生育暦は次の通り。

五代目古今亭志ん生（美濃部孝蔵）	明治 23 年生まれ、東京で育つ
桂文楽（並河益義）	明治 25 年生まれ、東京で育つ
六代目三遊亭圓生（山崎松尾）	明治 33 年大阪市生まれ、明治 37 年頃から東京で育つ

（3）中央式アクセント体系を有する近畿の方言においても、やはり、有核の語の後ではネ（あるいはナ）の上昇調と非上昇調の区別は明白であるが、無核の語の後ではそうした対立が中和されるように思われる。以下に、筆者自身の語例を、高起（平進）式と低起（上昇）式の語に分けてあげる。もちろん、例えば「ウゴク「ネと「ウゴクネとではニュアンスの相違がある。

ネの音調のタイプ	えらい（高起式有核）	動く（高起式無核）
上昇	「エ˥ライ「ネ	「ウゴク「ネ　乃至　「ウゴクネ
非上昇	「エ˥ライネ	「ウゴクネ
ネの音調のタイプ	すごい（低起式有核）	入る（低起式無核）
上昇	↓ス「ゴ˥イ「ネ	↓ハイル「「ネ　乃至　↓ハイル「ネ
非上昇	↓ス「ゴ˥イネ	↓ハイル「ネ

なお、無核要素の後での上昇の有無の中和については、田野村忠温氏が別の現象に関して指摘しておられる（1988:22）。

（補注）本稿は文部省科学研究費補助による研究成果の一部である。

参考文献

上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17 62-77

川上　　秦（2000）「服部氏のネの説に同調」『国語学』203 号　33-34

国立国語研究所（1963）『話しことばの文型(2)―独話資料による研究―』秀英出版

小松　寿雄（1998）「東京語における男女差の形成―終助詞を中心として―」『国語と国文学』63 年 11 月号　94-106

佐久　間鼎（1929）『國語音聲學』　京文社

永田吉太郎（1935）「旧市内の音韻語法」　斉藤秀一編『東京方言集』謄写版（国書刊行会より復刊（1976））

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152

中野　伸彦（1996）「江戸語の疑問表現に関する一つの問題―終助詞「な」「ね」が下接する場合の自問系の疑問文の形式―」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院

蓮沼　昭子（1988）「続・日本語ワンポイントレッスン　第２回」『言語』7／6　94-5

服部　　匡（1999）「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」『国語学』199　90-92

松下大三郎（1930）『増補改定標準日本口語法』中文館書店（勉誠社より復刊（1977）、そこから引用する）

松村　　明（1998[2]）『増補　江戸語東京語の研究』東京堂出版

森山　卓郎（1989）「文の意味とイントネーション」『講座　日本語と日本語教育　第１巻』明治書院

湯沢幸吉郎（1957[2]）『増訂　江戸言葉の研究』明治書院

Alfonso, A (1980)　"Japanese Language Patterns", Sophia University